

⑳教育条件

谷口 武 (市高・大阪ビジネスフロンティア高)
上村 康夫(市障・平野特別支援)
山田 一博(寝屋川・友呂岐中)

大阪府は、府立高校つづし、障害児学校の過大・過密、教職員の定数削減、教育予算を削減し、教育切りすてとしか言いようのない施策をとってきました。その結果、どの学校にも、教育諸条件の低下や教職員の大変な多忙化が生みだされています。私学助成の大幅削減や教職員の削減などの府政「改革」は、これらをいっそう推しすすめました。長期に続く不況下のもとで、大阪の子どもたちは、極めて貧困な教育条件の下におかれています。そして貧困と格差が広がっています。子どもたちの就学(修学)保障をすすめる運動、自校方式の中学校給食を実現する運動などを学校で働く教職員だけではなく、教育行政や保護者・地域住民のみんなが協力しあって希望にあふれる学校をつくるとりくみが大切であり、すべての子どもたちが、安心して学習することができる教育条件の整備がもとめられます。

㉑環境・公害問題と教育

高橋 慶二(元交野・郡津小)
鈴木喜代治(堺・日置荘中)

東日本大震災の地震と大津波、福島原発事故による避難生活・復興の目途はいまだ明確になっていません。原発の安全神話が崩壊し、「脱原発」「原発ゼロ」自然・再生可能エネルギーへの転換を求める運動が大きくひろがりました。夏の電力不足を口実に野田首相の政治的判断として大飯原発再稼働が決定されましたが、日に日に再稼働反対の声は大きくなり数万人の市民が首相官邸を取りまくまでになっています。私たちの分科会では、持続可能な社会建設への道筋を明らかにすることを研究目標のひとつにすえて、身近な環境問題から公害問題、地球環境問題を市民グループの実践や教育実践・教材分析など報告・交流してきました。昨年度は津波防災教育、原発や放射能について教育現場での現状や実践、ボランティア体験などの報告がありました。本年度もレポート発表、フリートーキング、共同研究者によるミニ講演をもち「みんなで生きていける社会」について話しあいたいと思います。

㉒文化創造と教育

好岡 和男(府高・布施工科高)
宮本 貴子(府高・泉北高等支援)

「厳しい競争的環境におく。強い力で規範を守らせる。基礎的な知識は刻み込んででも教える」といった風潮が子どもたちを「生きづらい社会」の中へ追い詰めていないでしょうか。
私たちは、これまで橋下「大阪維新の会」による「文化つづし」政策に反対し、次の点を確認してきました。①地域の文化や歴史、平和の大切さを語り伝える、歌い続けることは人と人とのつながりをつくり、広げていくことです。②人間への信頼を豊に育む文化は広く人々の共感の輪も広げる。子どもたちはもちろん、大人たちも文化を吸収して成長していくのです。③学校・地域に於ける図書館の存在意義は大きい。情報発信基地であるとともに文化創造への土壌でもあるのです。④個々の実践を互いに励ましあい、響きあう学校・職場づくり、平和で民主的な社会の形成へと発展させていかなければなりません。自分の思いを形に表し、社会に発信することこそ文化創造の出発点です。みんなで集まって大いに語り合ひましょう。

㉓教育課程・教科書

常田 秀和(南河内・彼方小)
山田 憲司(堺・東三国丘小)
山本 修平(枚方・中宮中)
熊崎 聡(柏原・堅下南中)

教育課程・教科書分科会は教育活動全体を統括的にみていく分科会です。
今年では中学校で(高校では一部)新教育課程が始まりました。小中学校では授業をすすめる上で、教科書の問題点も各地で出されてきています。検定制度や採択後の各地の動き、教科書デジタル化についても問題点を出し合ひていきましょう。
また「小中一貫教育」の問題など現場の実感を持ち寄り、子どもの実態にもとづいた教育課程編成をどう進めているのか、進めていくのかを考えていきましょう。
さらに、「君が代起立斉唱条例」「教育基本条例」の強行成立の中で、今後それぞれの学校での教育課程にどんな影響がでてくるのか、それと対峙する立脚点も展望していきましょう。

㉔生活科・総合学習

小林 桂子(東大阪・楠根小)
向井夫佐代(柏原・国分小)

昨年度より、新教育課程実施に伴い、5、6年生は、総合的な学習の時間が1時間減り、外国語活動が始まりました。生活科については、道徳化他教科との合科の強調など、何を教えるか教科からさらにわからなくなっています。生活科を教科として認識していない実態すらあります。道徳・特活・各教科と、色々なことが雑多にあつかわれ、「学び方」を学習する時間として位置づけられているのです。生活科は、低学年の子どもたちの「自然」「社会」「人間」に関する学びの場であり科学的な認識の土台づくりの教科です。
そして私たちは、教科学習とも連動し、「地域・自然・いのち・くらし・環境」を学び深め合う「総合学習」を追究していきたいものです。
子どもたちが、「やって楽しくよくわかり」教師が「取り組んでよかったと、充実感を味わう」ことができる内容や教材を学び合ひましょう。今こそ、「生活科」「総合学習」を洗い直す時です。子どもたちのこと、その学びについて大いに語り合ひましょう。

㉕登校拒否・不登校

実森 之生(市障教・本部)
松尾 裕子(八尾・竹淵小)

登校拒否・不登校状態のなかで、悩み苦しんでいる子どもたちやその家族、そしてどう対応しているのかと悩んでいる教職員・学校。
子どもたちは、「心の揺れ」を示しながらも、長い目で見たときには、家族、子ども集団や教職員、様々な人との豊かな交わりのなかで、「揺れつ戻りつ」大きな成長をとげていきます。
家族・教職員・関係者の思い、経験、とりくみを交流しましょう。それぞれの立場からの悩み苦しみ、思いを報告し、互いに豊かな感性を持って耳を傾け共感し、子どもたちの明日について語り合ひましょう。
登校拒否・不登校の児童・生徒の子ども理解を、レポート・事例などを通じて深めましょう。そして、子どもたちの成長を願い、父母・地域・教職員の共同による、子どもを主人公にした学校づくりを、今こそ進めようではありませんか。

切りとり線

あなたの日々の実践を寄せてください

(大教組教文部 FAX06-6768-2239)

第62次大教組教研レポート提出届

締め切り 9月10日迄

レポート要旨(200字)

Form with fields for: 分科会No, 分科会名, レポートタイトル, 市町村・学校名(または所属名), お名前, 連絡先 住所, TEL E-mail, レポート報告にあたっての要望 時間・ビデオなど

Grid for reporting content (20 columns x 10 rows)

この用紙を使って申し込んで下さい

(タテ書き)